

細田尚美.『幸運を探すフィリピンの移民たち—冒険・犠牲・祝福の民族誌』明石書店, 2019 年, 395 p.

長坂 格*

「ここにいても何も起こらない。だからサパララン [幸運探しを] したんだ。」(p. 10)

これは、著者がフィリピン中部のサマール島からマニラに移動した男性に、「なぜマニラに行ったのか」と聞いたときの返答である。フィリピンからの移民にインタビューをしたことがある者ならば、上の引用と類似した表現を一度ならずとも聞いたことがあるのではないだろうか。私もこれまでフィリピンからの海外移民にずいぶんとインタビューをしてきたが、彼らが移動の理由を語る際に、しばしば「運を試す」という表現を用いていたことが思い起こされる。本書は、このようにフィリピンの人々が移動について語る際に頻出するけれども、本格的な検討がなされてこなかった「運」や「幸運を探す」といった概念を中心に据えて、フィリピンのサマール島の人々の移動およびつながりの諸相を解明しようとする民族誌である。なお、本書では、移民という用語が、国内か国外かを問わず、居住地を移して移動する人という意味で用いられており、この書評でもその用法に従うことにする。

まず、序章、本論である4部(8章)、そして終章からなる本書の内容を、コメントを交えつつ紹介しておこう。本書は、フィリピン

ン中部のサマール島のバト村と、マニラ首都圏のバト村出身者が集住する2つの地区で、2000年から17年間に渡って行なわれたフィールドワークに基づく。まず序章では、「幸運探しをする人の生活、生きかたを多面的に記述し、かれらのコスモロジーのなかに人の移動を位置づける」(p. 20) こと、そして「神からの祝福とされる幸運という概念」(p. 25) に注目することで、フィリピン低地キリスト教徒社会についての「新しい『つながり』論を試みる」(p. 25) ことという本書の研究目的が、移民研究や東南アジア諸社会の研究との関わりで説明されている。

第一部では、調査地であるサマール島とバト村の人の移動の歴史が論じられている。サマール島については、1950年代頃からマニラの人口増や貨客船の大型化、斡旋業者の増加により、マニラに移住して家事労働職に就く女性が増加したこと、海外就労が本格的に拡大したのは2000年代であったことなど、同島の移動史についての興味深い指摘がなされている(第一章)。バト村については、世帯調査や家族史の聞き取りから、都市部、農村部への求職移動、開拓移動、結婚や教育のための移動などが、時代による変化を伴って広範に行なわれたことが説明されている(第二章)。ここでのサマール島、バト村の人々の移動の歴史的変化の記述とその背景の考察は、フィリピン各地における人口移動現象がかなりの多様性を伴って展開してきたことを具体的に示すものであり、フィリピンの人口移動研究にとって貴重である。

第二部では、本書のキーワードである

* 広島大学大学院総合科学研究科

「幸運探し」と訳される「サパララン」の意味や内容が検討されている。サパララン(*sapalaran*)とは、自らの運命に対してリスクを負って働きかけ、運命を変えていこうとする行為とされる。人の移動は、自らが慣れ親しんだ世界の外にある、危険に満ちているけれども多くの富がある場所に移動して、自らの運命を変えようとするとき、サパラランとなる。村人のサパラランとしての移動が目指す場所は、1950年代にマニラが目立つようになり、近年では外国も含まれるという具合に、人々の空間認識の変化とともに変遷し、拡大してきた(第三章)。また実際のサパラランは、偶然与えられる幸運をただ待つというようなものではなく、さまざまな仕事や機会を試したり、日々を生き抜くための術を駆使したりするなど、幸運を得るために絶えず工夫し続ける経験であるという(第四章)。

第三部では、幸運の宗教的社会的側面が考察される。まず第五章では、カトリック信者が多い村での信仰実践が概略され、神などの存在に対して願いを伝えるという祈りの側面が、サパラランの理解にとっても重要となると指摘される。そのうえで、マニラで比較的安定した職を得ることができた女性が、幸運を得た(=職を得た)ことを神からの「祝福」として語ることに焦点が当てられる。この語りの検討から、人間は慈悲深いとされる神に対して、祈りなどを通じて働きかけることで自らの運命を変えることができると考えられていること、そのような運命の変化は神からの祝福と語られること、そして神からの

祝福を得るためには、貧しい人を助けるなど社会的モラルを遵守しなくてはならないとされていること、などが指摘される。

第六章では、移民と故地の家族・親族との関係が検討される。成功した移民たちによる、故地の親族への贈与やフィエスタでの派手な寄付行為は、幸運探しの結果を誇示したいという彼らの欲求に基づくと同時に、自らが「利己的でなく、情に厚い」(p. 236)ことを指す「プオタン」な人間であることを示す行為でもあるという。また、神が人に対して慈悲深く祝福を与えるように、移民たちも自らが得た幸運を分け与えるべきであり、そうしない場合は「幸運はいずれ逃げていくものと信じられている」(p. 265)という興味深い指摘もなされている。

第四部では、まず移民たちが、親族間の相互扶助と自助努力という相反する2つの理念の間で、さまざまに位置取りを行なっている状況が、「複ゲーム状況」という概念を用いて記述分析される。また、富を持たない人々が、噂などを通して、富を得た移民たちの諸行為にコントロールを及ぼしていることも指摘される(第七章)。移民たちが、相反する価値や理念の下で、自らが獲得した富をどの程度、いかに周囲の人々に再配分していくかという主題自体は、移民研究では形を変えながら繰り返し論じられてきたものであり、ここでの論述の独自性はややみえにくい。それら既存の研究との丁寧な比較がなされていれば、あるいは相反する理念の間での移民たちの交渉が、この本の主題である「幸運探し」の概念とどのように絡み合うのかが

掘り下げられているなどすれば、ここでの事例考察がもつオリジナリティはより明瞭となったであろう。

続いて第八章では、マニラの移民二世、マニラの間層住宅地に引っ越した人々、国際移民を事例として、移民と村とのつながりの持続と断絶の様相がその背景とともに検討されている。移民と故地との関係は一般的に弱まっていくが、その関係は必ずしも完全に失われていくのではなく、島の言語を話せないマニラの移民二世が、親の病気の治癒を願って、突然村のフィエスタに出資した事例からもうかがわれるように、必要となれば活性化されるものであるという。ここでのマニラの移民二世の語りや故郷での諸行為についての記述は、出身地社会と都市移住者の世代を越えた社会的場の展開の一例として、とても興味深い。

終章では、本書で考察してきたサパラランとしての移動という「サパララン・モデル」がフィリピンの他の地域にも適用できそうなこと、不確実性が増大するグローバル化時代において「運」などのローカルな概念から移動を考察することがより重要となってくること、村出身の人々のつながりの基礎には神などの存在から与えられる祝福を分け与え、さらにその一部を差し戻すという「祝福の流れを感じあえる関係性」(p. 339)があることといった点が、結論として述べられる。

以上、本書の内容を多少のコメントを挟みつつまとめてみた。本書の主題である「運」や「賭け」については、フィリピンの人々の移動経験の語りに頻出することもあり、フィ

リピンの移民の研究において、これまでしばしば言及がなされてきた。しかし本書のようにこれらの概念を中心に据えて、一冊の民族誌としてさまざまな角度から論じた研究はこれまでなかった。このように類書にはみられない、「サパララン」や「運」などについての記述分析がふんだんに盛り込まれた本書からは、フィリピンの人々の移動経験に関心をもつ読者は、さまざまな着想や考察のためのヒントを引き出すことができるだろう。かくいう評者も、長く海外で働きながら多くの故地の親族を支援してきたフィリピン人から、親族を助ける理由のひとつとして「私のところに運がきたのだから」という言葉を聞いたことがある。そのときは、その点を掘り下げることができなかったが、著者による、移民による寄付や贈答は「幸運の分け与え」であるという捉え方は、この語りや類似の語りのさらなる探求を促すひとつの仮説として、興味深く読むことができた。

他方で、そのような「運」や「幸運探し」についての考察には、同じフィリピンを調査地とする評者にとって必ずしも説得的とは思われない箇所も見受けられた。たとえばサパラランと祝福の関係について論じた第三部では、幸運が得られたことを神からの祝福と呼ぶ女性の語りに主に依拠して、「祝福は[中略]、神が好感を持つ人に与えるものであるため、人間は、神のような慈悲の心に基づいた分け与えをするモラルに準じた人(プオタン)であり続けなくてはならない」(p. 26)という人々の考えかたが示されている。しかし、このようなサパラランについての「考え

かた」は、評者には、バト村の人々や移民によるサパランの経験の「物語」の、有力かもしれないが、ひとつのパターンから導かれたものであるようにみえる。そうだとすれば、さらに著者が述べるように村人の信仰実践が「最も多様性が見られる分野」(p. 194)であるならば、このような、祈り、神の祝福、神の慈悲深さ、宗教的社会的モラルの順守などの要素が特定の様式で結びついた物語以外の、サパランの経験の語り方は聞かれないのだろうかという疑問が生じる。移民の多様かつ複雑な自己のありようが示されうる移動経験の語りの中で、ひとつの物語のパターンに立脚し、当地の「コスモロジー」と結びつけながら人々の「つながり」のあり方にまで考察をすすめていく本書の論のすすめ方は、「幸運探し」という豊穡な主題の可

能性をむしろ狭めているようにもみえてしまう。

以上、類似の調査関心をもつ評者の立場からの本書の分析への違和感なども述べたが、著者が、これまでの移民研究においてあまり取り上げられることがなかった移動する人々の「運」などのローカルな概念に焦点を当てて集中的に論じたことは、移民研究の研究動向へのひとつの挑戦として価値をもつ。人の移動は、常に多層的に構成される社会的、政治経済的諸条件のもとで行なわれるが、それら諸条件と相互に作用しつつも、ローカルな想像力や諸概念が、多かれ少なかれ人の移動を形作ったり、また移動の解釈のし方を方向付けたりすることも確かであろう。ユニークなアプローチで移民現象を解き明かそうとする著者の研究の今後の展開が楽しみである。